

導入事例
てれたっち

デジタルの世界と自分の体験が結び付く瞬間! 「楽しい」が「わかった」に変わる「てれたっち」の授業。



和歌山県の橋本市立学文路小学校は、「てれたっち」を効果的に活用した児童参加型の授業を実践されています。ICT化に積極的に取り組む同市の充実した環境で、ディスプレイ2台と黒板も合わせた「3面使い」も実現。同校の畑清史先生(4年生担任)と夏目孝夫校長先生、また、橋本市教育委員会事務局学校教育課・川原一真主任指導主事にお話を伺いました。
※先生のご紹介、学校での設置状況などは取材当時のものです。



※ディスプレイは別売りです。

導入商品

外付け型タッチ化ユニット
「てれたっち」

DA-TOUCH / WB

■ 念願の電子黒板導入! ディスプレイ2台と黒板も合わせて「3面使い」も

授業では、具体的にどのように「てれたっち」を活用されていますか。

畑先生:「てれたっち」搭載のディスプレイと、書画カメラを接続したディスプレイの2台を並べて使うこともあります。黒板も合わせての「3面使い」ですね。「てれたっち」は資料を見せるために使うことが多く、もう1つのディスプレイは児童のノートなど、現物を拡大して共有します。また、黒板はその日の授業のめあて、まとめなどを板書するために使っています。

算数では、実際に組み立てられる立体ブロックを使った、非常にわかりやすく、また盛り上がる授業をされていましたね。

畑先生:立方体画像と展開図を載せたパワーポイントの資料を準備し、「てれたっち」付属の白板ソフトの透明モードで表示します。児童にはプラスチック製の展開ブロックを配布し、表示した立方体を作らせます。さらに問題の答えを直接「てれたっち」の画面に書き込んだり。多数の展開図を表示してグループで議論することも。児童の作ったブロックは、書画カメラで既存のディスプレイに表示します。



ブロックと画面の展開図が一致

■ 「楽しい」が「わかった」につながる、「てれたっち」ならではの授業

「てれたっち」に対する児童の皆さんの反応はいかがでしょう。また、学習効果がありましたら教えてください。

畑先生:楽しみながら、テンポよく授業を進められるおかげで、モチベーションが上がっています。時間効率もよくなりました。あくまで体感ですが、今までの1.5時間程度の内容を、1時間の授業に凝縮できているように感じます。これまで時間をかけて黒板に書き込んでいた図などは、ほぼ「てれたっち」で素早く表示できるようになりましたから、その分、授業を先に進めることもできています。

夏目校長先生:電子黒板の良いところは、思考の流れができることだと考えています。先生が板書をする間に児童の思考が途切れてしまうと元に戻るのが大変で、授業にロスが発生してしまいましたが、「てれたっち」の活用でそうした心配もなくなりました。



ディスプレイ2台と黒板を併用

■ 学びの目標である、「思いを出してぶつけ合うこと」を実現するために

従来の授業と「てれたっち」による授業の違いはどのようなところにあるとお考えですか。

畑先生:本校は、「話すこと」「聞くこと」を通じ、「自分の考えをわかりやすく表現し、伝えあい、意欲的に活動する児童の育成」を研究課題にしています。これは「てれたっち」があったほうが実現しやすいです。児童たちが私の伝えたものを受け取って、自分なりに理解したものを画面に書いていくことは、「思いを出してぶつけ合う」ために重要なプロセスとなります。間違いを恐れずに書き、間違えていたら友達に指摘してもらい、共に答えを考えます。そういった学びを通じ、記憶や理解をより定着できるようになってきました。

夏目校長先生:表現することに慣れない児童も、「てれたっち」を使って自分の考え方をうまく伝えられればと考えています。実物との併用はより効果大きいとも感じます。画面上にデジタルで表示されるものと実物がつながるといふ、実感をもった体験が重要です。

ICT導入に関する将来のビジョンなどをお聞かせください。

川原指導主事:教育現場におけるICT機器の導入は、効果が数値で測定しにくい面もあり、導入は予算との兼ね合いです。こうした中で、既存資産を活かしつつ安価に導入できる「てれたっち」は、様々な課題に対する一つの回答になるかと期待しています。



課題の答えを皆の前で書き込み

取材にご協力いただいた先生

橋本市教育委員会事務局
学校教育課
川原 一真 主任指導主事橋本市立学文路小学校
夏目 孝夫 校長先生橋本市立学文路小学校
畑 清史 先生

CLIENT DATA

導入学校 / 橋本市立学文路小学校
所在地 / 和歌山県橋本市
設立 / 1876年